

平成 29 年度「水環境文化賞」を受賞して

ひろさき環境パートナーシップ 21 副代表 村田 孝 嗣

この度は、栄誉ある水環境文化賞をいただき、誠にありがとうございました。当団体の「弘前だんぶり池」(だんぶり：津軽弁でトンボのこと)は、平成 15 年の開所から本年度で 15 年を迎え、節目の年に活動を表彰していただいたことは、今後の活動の励みともなり、会員一同、厚くお礼申し上げます。

1. だんぶり池づくりの経緯

「お城と桜とりんごのまち」で知られる青森県弘前市では、平成 11 年に環境施策の指針となる「環境基本計画」を策定することとなり、検討委員会を立ち上げました。このとき、検討委員会の委員長をしておりましたのが、「ひろさき環境パートナーシップ 21」代表の鶴見實(弘前大学名誉教授)で、私は職務代理者を務めておりました。

環境基本計画は、2 年をかけ平成 13 年 3 月に策定となりましたが、絵に描いた餅に終わらせず、市民と行政が協働して環境問題に取り組んでいくため、環境パートナーシップ協定締結を行政に働きかけることとなりました。まず、検討委員会の元委員が中心となって、平成 14 年 2 月に、市民団体「ひろさき環境パートナーシップ 21 (略称：HEP21)」を設立し、翌 3 月、HEP21 と弘前市は、協働の原則や、役割分担等を明記した「環境パートナーシップ協定」を締結しました。

HEP21 には、自然環境、生活環境、快適・文化環境、農業環境、地球環境、こどもエコクラブの 6 つのグループがあります。私の担当しております、自然環境グループでは、環境基本計画策定中に、青森県レッドデータブックで絶滅危惧種 A ランクに指定されている「ハッチョウトンボ」や「ハラビロトンボ」が、市内の休耕田に生息していることを、私の方から検討委員会にご紹介したことがきっかけで、これらの保護を含め、環境基本計画の重点施策である「自然環境の復元」を具体化することとなり、「だんぶり池」づくりが始まりました。

2. 生物多様性に配慮した「だんぶり池」づくり

だんぶり池は、市街地から離れた里山地域にあり、サワガニやカジカなどが生息する赤沢・大畑沢という 2 本の清流に囲まれた休耕田(10 枚・約 5,500m²)です。休耕田は市が買い上げましたが、デザインや整備作業は自然環境グループの会員が中心となって行いました。

だんぶり池づくりにあたっては、動植物を持ち込まない、持ち出さないを原則とし、自然の力による環境の復元をめざして、現存する生物への影響を最小限とするため、機械力に頼らず人力で池の掘削や木道の整備等を進めました。また、10 枚の田んぼは、それぞれ水深や形態を変化させた池とし、生物多様性の確保に努めました。

例えば、最上流部の 1 番目の池は「カナコ菴」(カナコ：津軽弁でイトトンボのこと)と名付けられ、水温の

低い沢水が最初に流入する低水位の池です。オモダカやイグサ等が生える湿地帯のある池で、文字通りイトトンボ類が羽化する池となっています。2 番目の池は「ウルメ池」(ウルメ：津軽弁でメダカなど小魚のこと)と名付けられ、比較的水温の高い、高水位の池です。ヨシやガマなどが生え、メダカも多くいます。また、流水を好む生物のために、水路を設けた池などもあります。

このように池の形態に変化をもたせた結果、だんぶり池では、現在まで 43 種のトンボが確認されたのをはじめ、ゲンジボタルやヘイケボタルなども見られるほか、ドジョウやカエル類もたくさん生息するため、カワセミ等の鳥類も見ることができると、無移植にもかかわらず、多様な生物が生息する空間となっております。

3. 「だんぶり池」を活用した体験型環境学習など

だんぶり池では、毎年 4 月～11 月に、月 2 回の維持管理活動で、自然環境グループの会員 50 名と、HEP21 こともエコクラブ員 20 名ほどが、木道の整備作業や草刈作業等を行っております。

また、体験型環境学習として、毎年、近隣小学校の総合学習の時間に、水生生物等を採用する自然観察会を行っているほか、地元の弘前大学とも連携し、各種生物調査なども実施しております。また、これらの調査等をまとめ、一般市民も対象として「自然環境学習会」を毎年開催しているほか、エコクラブの子どもたちや近隣小学校生から、だんぶり池に生息する動植物のイラストを集め「だんぶり池カレンダー」を毎年作成し、市内関係機関等に配布する活動もしております。

終わりに、今回の受賞を励みとし、今後も上記のような活動を継続して、健全な水環境の保全と創造に、なお一層貢献していきたいと思っています。また、学会関係者の皆様、審査に関わられた皆様に心から感謝いたします。



写真 1 「弘前だんぶり池」アプローチ広場